
魔法先生ネギま ～最高の栄誉と恐怖を司る者～

やまだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま 最高の栄誉と恐怖を司る者

【Nコード】

N82630

【作者名】

やまだ

【あらすじ】

目が覚めたら目の前にかみs（ryという有る意味王道ともいえる、まあ理由はともかくネギまの世界へ転生して欲しいとのこと。もう元の世界で生き残れないんだなと理解しつつトラックチート転生テンプレ乙wwつて喜んで・・・いるはずがねーだろがよ・・・俺しか子供いないのに親の面倒とかどーするんだ などと考えている27歳彼女持ちの一般人 アフターケアはしてくれらしいが・・・

何はともあれテンプレ通りに転生させられた元リア充の一般人を活

躍をこらんあれ!!!

基本原作沿いとあつたんですがすいません大幅に原作ブレイクしまくります クロスは 影技 SHADOW SKILL ばればれでしたねw 設定と技くらいですが

改めて始めての方は初めまして、今回初執筆させていただくやまだというものです。前述どおり初執筆なので誤字などがありましたら是非御一報ください。おそらく3人称やら1人称やらごちゃごちゃになると思います・・・

執筆も遅筆の為不定期になると思いますが完結を目指して頑張つて生きたいと思います。感想などありましたら追加したほうがいいキーワードや苦言提言問わずどしどしよろしく願います。後シテム事態がよくわかっていないのでこうしたほうがいいよ的なこともありましたらあわせてよろしくおねがいします！

プロローグ (前書き)

さあ初執筆になります！
といってもとりあえず転生テンプレだけ
ですが・・・

プロローグ

やあみなさんはじめまして！俺の名前は秋月昇あきしきのほる高校三年生の17歳だ。

好きな漫画はネギま、アニメはリリカルなのは 生粋のオタクだ
ここ最近では2次創作の小説を探しては読みふける毎日、おかげで
授業中は眠くて仕方が無い まあどうでもいいがwww

現在は火曜日の朝、とりあえず登校途中のコンビニで昼飯とついでに週刊マガジンを購入し読みながら足を進める

「・・・しかし原作のネギも2次創作並みのチート仕様だよなwww
」

そう！魔法世界編のネギとそれ以前のネギのギャップが色々他所でも言われているがもはや別人であるwwwまさに主人公補正万歳
すぐるwww

「ま、少年漫画だしこれぐらいでもいいのかもな。だが!？」

そう、今のネギまには重大な欠点がひとつある！それは何だと思
う!？

そつだエヴァ分が足りない!!!!!!

否!!!!足りないという言葉で優し過ぎる!!!もはや絶滅危惧種
にしてもいいくらいだ!!!!!!

諸君、私はエヴァが好きだ

諸君、私はエヴァが大好きだ

「だから まる じゃねーっの。はあ」

そんな彼の前を唐突に青いボールが右から左へ弾みながら通り過ぎる

「ん？」

吸い寄せられるように道路の中ほどで止まる、そして

「こらまでよー！ー！！」

それを追うようにして子供が道路に飛び出す 車が行きかっている道路へと

……道路お！？！？！？

「はふえ！？」

いきなりなできごとに思わずおかしな声が出るがそれどころではない！！何かを考える前に子供の後を追うように走り出す

「ちよ、までよー！！！！」

はい今笑った奴ーシャレにならんから今は笑うなwwwって俺が笑ってるやん、と頭の中がてんぱりまくりで子供に追いつくが目の前にはトラックが迫っている

急ブレーキを踏んでいるが間に合いそうに無い。咄嗟に子供を抱きしめる

「ふえ？」

子供がキョトンとした目でこっちを見てくる・・・ん？トラック・
・だと・・・これはまさかのトラック転生テンプレk t k r な
どと一瞬喜ぶ自分がいたが腕の中のほのかな温かみで現実に戻される
そうだと、ここは2次元の小説じゃない。トラックテンプレなんて
あるはずがないのだ

何トンもあるトラックにぶつかれば死ぬ、これは厳然とした事実
である。俺だけならまだしも子供を殺すわけにはいかない

どうする、どうするよ俺！？ライフカードなんぞない！！あああ
あああどうするよ！？

- 1・子供だけでも助ける為歩道へと子供を投げる！
- 2・謎の人物が助けてくれる！！
- 3・華麗で素敵な秋月昇はすばらしいアイデアを思いつく
- 4・残念、ここで二人の生涯は終わってしまった

1 無理！物理的に無理！自慢じゃないが俺は帰宅部のオタク、
間違ってもそんなことはできない！！！！

2 謎の人物ってだれだよ！？

3 思いついたのがこんなしょうもないことだよ！！！！

4 4 4 4 4 4 4

せめて子供だけでも！

子供を全身で抱きしめるようにしてトラックから背を向ける！有
る程度速度が落ちたトラックなら俺の体がクッションになるかもし
れない！？そう思つての咄嗟の行動であった

目を瞑り体に力をいれ歯を食いしばり衝突のショックに備える

おもわず自分達が助かったという安堵から大きく息を吐き出して
しまう

「おい！だ、だれか救急車！人が巻き込まれたぞ！！！！」

・・・・・・・・え？

side : B

俺の名前は運切業^{みだきりしゅう}27歳のしがないサラリーマンだ。一応彼女持
ち っ て 誰 に 説明 して る ん だ か

はあ、どうやら飲みすぎたらしい。いくら今日休みとはいえ飲み
過ぎた うむ、今日は1日グータラにすごす。決めた！

幸い予定もないシタ方まで寝てそれから晩飯の買い物でも行くか・
・とアルコールの残っている状態で歩いていると唐突に響いてき
たブレーキ音

やや二日酔い気味の頭に響く音に顔をしかめながら顔を上げ周囲
を見渡すと

目の前に唐突に現れた巨大なトラック

「・・・・・・・・What's?」

どうやら俺は家に帰っている夢を見ていたらしい。そんな思いと
共に全身を衝撃を襲うが痛みは不思議とない

やはり夢の中のようなようだ、まったく休みだからといって飲みすぎは
よくない。起きたらさっさと家に帰って寝るとするか

ゆっくりと意識が遠くなっていく中そんな風に考えていたのだった

それがこの世界で最後の記憶になるとは知らずに・・・

プロローグ（後書き）

えーぶっちやけこれでよかったのかと今も悩んでいます

なにぶん経験が無いので感覚で執筆しています。誤字脱字等あれば是非是非いただければうれしいです。

とりあえず完結へ向けての最初の一步を踏み出しました

プロローグのみで終わらないよう頑張っていきたいと思えますのでよろしくおねがいしますwwww

プロローグ(中)

「ん・・・・・・・・」

ああやはりさっきのは夢だったようだ

その証拠に痛みを感じない まあ重症すぎて痛み止めを打ってある可能性もあるがなんとなくそれはないだろうと考えてしまう

しかしずいぶん長い間寝ていたようだ 予想していた二日酔いの頭痛さえしてこない

「やれやれだな」

ゆっくりとまぶたを開けていくと

「よお、ずいぶん寝ていたな」

「!?!」

目を開けた瞬間見知らぬ顔がアップになっていれば誰でも驚くだろう

「え、えつと!?!」

おそらく飲みすぎていつかのようはどこかの道端でねてしまったのだろうか?

「すみません!ご迷惑おかけしました!」

はねるように起きてとりあえずこの場から急いで立ち去ろうとあ

たりを見渡すが・・・

「・・・Whats?」

見える限り痛いほどの白い空間が広がっている。はて、まだ夢を見ているのだろうか。現実的に見てこのような場所にいるはずがない

このようなときのお約束、頬をつねってみる

「うん、痛いな」

「おいおいまあお約束といえばお約束だがもう少しひねって欲しいな」

「!?!?」

急いで振り向いてみれば先程の男がこちら見て悠然と立っている

「・・・」

喉がカラカラに渴いたようになり上手く言葉を発することができない。果たして今がどういう状態なのか、どういう場所なのか。それともまだここは夢の中なのだろうか？

さまざまな思いが頭を駆け回るがまったくして形になってくれない。当然だろう俺は漫画好きのただの一般ピープルなのだから理解できないことに対してパニック状態になるのは仕方が無いだろう!?!?

「ま、正確には一般ピープル(だった)てのが正しいかな」

「どづいつ、ことだ？」

「簡単に言えばあんたはトラックに押しつぶされて死んだ、それだけだな」

「は？」

「今は覚えていないかもしれないがあんたは道路に飛び出した人間二人を避けようとしてハンドルを切ったトラックにつぶされて、死んだんだ」

男の言葉と共に夢だと思っていた瞬間を思い出す

「あれは、夢じゃなくて現実だったのか・・・ なら今ここにいる俺は何だ？そして貴方は誰だ、いや誰ですか？」

「お前は幽霊みたいなもんか、肉体を持たず魂のみの状態だな。俺はお前達の言う神様ってやつ、かな？」

「かな？つて、ということは貴方は死神！？」

「あー近いけどちょっと違うか。ま、管轄が近いから違つとも言い切れないがな」

「か、管轄？」

「気にしないでいいよ、今はあんまり関係ないから」

「はあ」

あまり要領を得ない返答にまいまいな返事を返すことができなかった。正直あまり状況をつかんでいないというのもあるだろう。ただ、自分が死んだというのはなぜかストンと納得できてしまった。ああ俺は死んでしまったのか、と素直に理解してしまったのだ。「と、とりあえず何故俺はここに？ここから天国か地獄に行くのですか？」

「いんや、本来なら問題無用で輪廻の環に逝って貰うんだが事情が事情でな」

「事情？えーと俺何かしましたか？」

「何かしたのはお前じゃない、俺の同僚だ」

彼はやれやれといった様子で首を振る

「おまえが引いたトラックの運転手に同僚が祝福を授けていてな、無病息災程度だがそれがどういうわけかよくわからん作用をして運転手が無傷な変わりにお前が死んでしまったというわけだ」

「はあああああああああ！？」

あまりの事に叫んでしまう

「よくわからん作用ってどういうことですか！？あんた神様なんですよー！？」

「よくわからん作用と言ってるだろう？こっちもこんなことが起きるなんて前代未聞なんだ、同僚は更迭。さらにこの事件の調査にか

なり大物が出張ってきてる」

「あゝで、俺はいつたいどうなるんです、生き返れるんですか？」

「いや、申し訳ないが生き返らすことはできない。それは自然の摂理逆らってしまう、それこそうちのトップが許可を出さない」

「じゃあ俺はいつたいどうなるんです、わざわざ事故の説明をするだけのためにいるんじゃないですよね？」

「故意ではないとはいえこちらの過失だからな、それなりの保障をとのことだ。転生って聞いたことがあるだろう？」

「ええまあ」

「いわゆるチート転生って奴だな、ある程度力を与えて違う世界へご招待。お前の世界にはよくある話だろう？」

まさか2次元のネタを自分が体験するかもしれないというのはいろいろな意味で衝撃だった

「・・・まさか実際に自分におこるなんて思いもしませんでしたよ」

「そりゃそうだろう、そもそもこんな事件が起こるなんて予想さえしてなかったし。ま、ラッキー程度に思ってくれや」

「死んだ時点でラッキーなんて思いませんよ。・・・あ！ちよつとまって下さい家族はどうなるんです！？俺家族関係結構複雑なんだけですけど！？」

「そつちの方は安心してくれ、何度も繰り返すがこちらのミスである以上それなりにケアは考えている。あまり過剰なことはできないが、そうそう不幸にはならんよ。もちろんお前の彼女にも含まれている」

その言葉に少し安心する、先程の言葉を聞く限り家族の先はそれほど心配する必要は無いだろう。俺は長男だが妹がいるから婿でもとるのだろうか？彼女には悪いことをしてしまったが、俺が死んでしまった以上いい縁に恵まれることを祈るしかない

「さて、随分と長々としゃべってしまったが現状は理解してもらえたとと思う。もちろん納得はできないかもしれないが、こちらとしては最大限の保障はさせてもらったつもりだ」

「ええまあ納得は出来ませんがこうして死んでしまったからにはしょうがないなと思ってます。むしろただ死んでしまって家族の心配をしなくなった分、感謝したいくらいです」

「おいおい故意ではないにしろお前を殺してしまったんだ、このくらいは当然だろう」

そついうと目の前の神？は頭をがしとかきむしる。随分と人間っぽい神？様もいたもんだと内心苦笑してしまった

「で、お前はどんな力が欲しい？」

「ほえあ？」

いきなり・・・でもないが神？様の質問に言葉にならない言葉が出てしまった

「だから力だよ、さっき言ったろ？チート転生って。あまり無茶な願いは叶えられないが結構無茶な願いも聞くぞ？」

カ・・・カねえ・・・一応漫画や小説が好きで色々思い浮かぶがその中でもトップクラスに好きで力といえは

「そう、ですね・・・じゃあ・・・」

ブログ（中）（後書き）

まことに申し訳ありませんorz

予想以上に長くなってしまいブログを3分割にすることに相成りました！

うーん会話分多すぎる気も、直していかないと。

近日中に続きはUPしたいなどは思ってますので申し訳ありませんが少々？お待ちください。

未だに転生しないとか自分の文才の無さに泣けてきました・・・

プロローグ(下)

「シャドウスキルってわかりますか？」

「へえ・・・随分コアな奴を選ぶじゃないか」

「知ってるんですか!？」

すると男は大仰に

「俺は結構好きだぜ。因みにお前の世界の漫画はこっちでも人気があつてな、随時こちらにもおくられてきてるんだぜ(苦笑)」

「あ、あははははははは」

俺の世界の漫画は神? 様にも通用するようだ オタク文化もここまですれば万々歳だろう(笑)

「で、どうすればいいんだ？」

「あーえーと、そうですね・・・因みに制限とかあるんですか？」

「こちら側の許容範囲内であれば大丈夫だ。因みに送る世界はそこそこ力があったほうがいいかもしれないな」

どうやらかなり自由が利くらしい。ならばできるだけ意見を言うて採用できる内容から選ぶか

「不老とかできますか？」

「不老不死じゃなくてか？」

「はい、不死になってしまつと自分がつらくなりそうですから・・・」

「そうか、まあ大丈夫だ。ただ復元呪詛くらいは入れておいたほうがいいかもな」

「あ、それじゃあそれもいいですか？」

「OKだ」

突然虚空に現れたウィンドウとキーボードらしきものを使い何かを入力？していく

「ほれほれどんどん言ってみろ」

これでまあそうそう死なないだろう。後は物理的な力だと

「さっき言ったシャドウスキルの業わざが使えるようになるとか」 業は誤字じゃないです

「んーとりあえず表技、影技、陰技、神技と呪符スレイム魔術士の呪符でいいか？」

「はい十分です。というか神技つかえるんですか!？」

「もちろん使えるぞ？使つても今なら確実に体はぶつ壊れるだろうけどなwww」

あまりの発言につい噴出してしまっ

「ちょっとwwwじゃあ将来的に神技にも対応できるような身体をお願いします。呪符が使えるなら魔力もあるみたいですし気とかも使いたいですね」

「気は別にかまわないが将来的に？」

その言葉に神妙そうに答える

「実はその事なんですけど考えたんですけど、実際に誰かから教えてもらうことってできないですか？」

「そりやまたなんでそんな面倒なことを？技を使えるようにするくらちよちよいと出来るぞ？」

「そうかもしれないんですけど、知つてのとおりシャドウスキルのクルダ流交殺法って歴史と業が深いじゃないですか」

「・・・」

「シャドウスキルって作品に限らず岡田さんの作品は歴史と業が結構重なりあつた漫画で、自分はそれが好きなんです。俺の名前にも業ってあるせいかもしれませんが使えるから使うってなんか・・・うーんすいませんどう言葉にしたものか」

すると男は少々考えるそぶりを見せると

「よしわかった。ちょっと待ってる」

と携帯のようなものを取り出してどこかに連絡をし始めた

「……！だから……！あ、許可だと！？……だろ！……
……だったら！？……わかった、それなら俺にも……お前の秘
密……をばらすぞ？……よし、ならお前から許可絶
対もらつておけよ？OKそれでいい、今度合コン誘うから……じ
ゃあな」

振り返った男はとてもいい笑顔で

「快く許可をく「嘘でしょ！？今秘密をばらすとか言ってますたよ
ね！？脅してるじゃないですか！？」よ……そんなこと言った記
憶はないなあ」

今のは突っ込みどころ過ぎる。秘密をばらすとか神？様のやるこ
とじゃない！？

「まあまあ落ち着けよ。経過はどうあれ結果的には許可をもらえて
お前はハッピーあいつは秘密をばらされず合コンに誘われてハッピ
ー、OK？」

「OKじゃないですから！さらに今秘密をばらされずって言いま
したよね？よね！？」

「なに些細なことさ、何度も言うが許可は取った。存分に教えても
らうがいい」

「些細なことつて……教えてもらうがいいって誰かここに呼んで
貰えるんですか？」

「いや・・・お前にはシャドウスキルの世界へと渡ってもらおう」

「・・・は？」

そうそう何度も驚かされてたまるかと思いつつ再び驚いてしまう

「ということは俺はシャドウスキルの世界へ行く予定だったんですか？」

「本来行く世界とは違うがお前の要望を可能な限り叶えてやるというのが上からの命令だからな、もちろん上限はあるが。直接教えてもらってこいや、手段は自分で考えるよ？w」

「あーそれじゃあ写輪眼みたいな眼とかもいいですか？」

「それまで入れるとちときついな。シャドウスキルの世界だけの限定なら何とかなりそうだが」

「ぜんぜんかまわないです。必要なのはシャドウスキルの世界でだけですから」

「こんなものか、じゃあお前の身体にリンクさせるぞ」

キーボードらしきものを操作すると自分の身体が光に包まれ

「まずは神技に将来対応できるような身体能力と才能。さらには表技、影技、陰技、神技に呪符の知識のDL。魔力と気の才能と・・・
ついでに今回限定の写輪眼、ほい」

ボタンを押すようなしぐさを見せると強烈な輝きが眼を俺の目をくらませた

再び眼を開けると・・・

「よう、随分と可愛らしい身体になったな」

男の姿をなぜか見上げようになっているのだった。自分の身体の違和感に手を上げてみると

「な、何じゃこりゃ~~~~~~~~!!?!?!?!」

「お約束乙wwww」

あきらかに自分の身体が小さくなっているのだった! ってなんだこれは! ?

「いや、将来的についていうからとりあえず小さくしてみたwそれなりに成長したら止まるから安心してくれ」

「安心してってくれて言われても! ?ってこの身体は」

よく自分の身体を見つめると肌が浅黒いことがわかる

「そうだ、やはりクルダの業はクルダ人にしか正しく使うことが出来ない。ゆえにお前の身体をクルダ人に組成を組み替えさせてもらった。今は大体5歳くらいか」

「まあそれはしょうがないか。この姿で不老じゃないだけでした」

「これで準備も終わったことだし、別れの時間だ」

例の台詞を言ってしまったフラグなら次は

「ガキが戦場に出るなんて甘いんだよ!？」

後ろからの怒声が俺を叩くように打ち付ける

ガキ!!俺、つまり

「ちよまちよてyちよy」

言葉にならない言葉と共に振り返るとこちらを狙って剣を振り上げる男 うむ、いい筋肉だ。 やらないか？ なんて

「言ってる場合じゃねえ!？」

ヒュイン!

振りあげられた剣が前髪をかするようにして振り下ろされた。避けれたのは全くの偶然だが次は無いだろうと必死に逃げようとしたが

ゴッ!

腹部を蹴られる衝撃で息が詰まり、それ所ではなくなった

「カ・・・ハ・・・ッ!」

再び振り上げられた剣を歪んだ視界の端に捕らえるが、息をすることも満足に出来ない俺に何かできるはずもなかった

再び生き返ったのにこんな所で・・・

そんな思いが頭を回っていると急に視界が灰色になり周囲の動き

先程のように思ったより早く地面へと降り立つ。そしてあわてて周囲を見渡せば近くには森が見え、特に人影ももない。大きな平野に降り立ったようだった。

「ようやくシャドウスキルの世界へまともにたどり着いたなあ・・・」

先程のことはもはや記憶の彼方へと放り投げる

「何はともあれ、食料の確保。それに街をさがさない」と

ついにシャドウスキルの世界へとたどり着いた運切業。彼のチートはここから始まる！

「さあ行くぞー!!」

シャドウスキルの世界へと一歩踏み出し

プロローグ(下) (後書き)

はいようやく長かったプロローグが終わりました！

・・・長かったというより長すぎる。上手く文を短く出来ないorz
プロット通りとはいえあまりにも長すぎました…;

もうすこし短くなるようにしないと)・@w@)

な、なにはともあれプロローグ終了！

外伝 1

あーえーと初めまして、ゴウです。と言っても状況がわからないですよ、大丈夫です。俺もわかりません。

ハハハハハ、と空笑いを上げながら今日も空は青いなあなどと現実逃避を試みる。

頭部のたんこぶ、頭の近くにそこそこの大きさの石。

「現在の自分の状況を見る限り、真実はいつもひとつ！」

記憶喪失

だ

!!!!!!

自分の格好は黒のパンツにぴったりとしたシャツ、のみ。以上。終わり。

まったくどうなっているのかわからない、幸い名前？とおぼしきものを覚えているのはいいことだと思おう

お金らしきものも無く、身分を証明するものもない。どうにもならないとはこのことである

とりあえずの緊急事態としては

ぐうう~~~~~

腹、へった・・・

いつごろから気絶していたのかはわからないが腹がへって力が出ない

「現代人の俺にはきつ過ぎる・・・金も無きゃコンビニもなさそうだしなあ、って現代人やらコンビニってなんだ!？」

はて、空腹のせいか意味不明な単語を吐き出している。空腹も末期にきているのだろうか？

現状を打破するにはどうすべきか、とりあえず水場でもさがさ「おい坊主、こんな所で何をしてやがる？」

・・・救いの神キターーーーー！！！！！！

SIDE：男

俺が坊主を見つけたのは街から街へと移動する平原だった。近くには街もないし少々警戒しながら話しかければ

「な、何か食わせてください！！！！」

あまりの勢いについて保存食の干し肉と水をやったらすごい勢いで食いやがる、どんだけ食ってなかったんだか。おもわず苦笑を浮かべると坊主は照れたように褐色の肌を赤らめる

そこそこの量があったんだがぺろりと食いやがった坊主に改めて尋ねてみる

「坊主、こんな所でどうした？親とはぐれたか？」

するとどうだ、突飛な事をいいやがるから驚いちゃった

「じ、実は記憶がないんです！何でここにいるのかもわからなくて

「記憶がないだあ？」

「気づいたら倒れてて、頭にはたんこぶがあったからそのせいだと

おもつんですけど・・・」

坊主は後ろを向くとこっちに後頭部を見せるようにうつむく

「おーオー見事なたんこぶだな」

その見事にふくれたたんこぶを思わずつついてみた

「痛っ！？何するんですか!？」

「いや悪い悪い、あんまりにも見事だったもんで、な？悪い悪い」

よほど痛かったのか涙を浮かべた目でこちらを睨んでくる

「しかしどうしたもんか、記憶がないんじゃないし親も捜しようがないしな」

そう言つと坊主はうつむいてしまった。・・・まあなんだかんだいつて結構気に入っちゃったからな、こういうのも縁だからしょうがねーか

「おい坊主」

考え込んでいたところに突然呼ばれたからかキョトンとした顔でこちらを向いてくる。へ、こまっしやくれた坊主だとおもったが結構かわいいじゃねえか

「あの、な。お前さえよかつたらついて来るか?」

SIDE:OUT

「あの、な。お前さえよかったらついてくるか？」

その一言には驚いて言葉も出なかった。身元不詳の子供、しかも記憶喪失というおまけ付を引き取るような真似をする人がいるなんて。

俺の記憶の中の人間ってなぜか冷たいイメージが大きいが覆れてされてしまった

「いいん、ですか？」

「こついつのも縁だろうからな、おなじクルダ人同士助け合つのも悪かねえだろ」

ここでもうひとつの発見どうやら俺はクルダ人という人種らしい

「もし問題なかったらいいですか？」

「問題は・・・あるだろうがま、細かいことは気にするな。いつでもあんまりしてやれることはないだろうけどよ」

それは・・・そうだろう。だけど今はこの出会いに感謝しよう

「おっと俺の名前を覚えてなかったな。俺の名前は俺は闘士ヴァールのマル

ボ―・メンソライトだ」

「俺の名前は……ゴウって名前だと思います。多分」

「多分って……あーじゃあ坊主改めゴウ、ついてこいや。色々そろえないといけないからな」

「はい！」

俺の足にあわせてかゆっくりと歩き出してくれる。

外伝1（後書き）

現在仕事場から隠れて投稿中なので少々短いですがここまでになります
男の名前の元ネタは・・・はいこれもばれればねw
目の前にころがっていたものですか
とりあえず外伝をちよつといれてからの本編になるかと
とりあえず歴史調べて年代の調整しなきゃ・・・
頑張りますのでよろしくお願いします

外伝 2

そしてマルポーと出会って数ヶ月・・・

俺はなぜかクルダ流交殺法 表技 ひょうぎ っっていうやつをマルポーさんから習っている。正直何故習っているのかと聞かれれば・・・俺にもわからない。マルポーさん曰くクルダ人 クルディアスたるものクルダ流交殺法を覚えるのは常識という奴らしい。

因みにクルダ流 表技 ひょうぎ は主に手技と投げ技がメインらしい、というかそれしかない。足技は影技って言う奴に分類されているらしい。らしいらしいばかりだが全部マルポーさんから聞いただけなのだから仕方ない。

そんなこんなで色々教えてもらってるのだが、マルポーさん曰く俺は天才らしい。習い始めて数ヶ月の俺はいまいち信じられない。

おそらく最初のうちは持ち上げつつやる気をださせようという教育方法だろう。とはいってももの俺自身が結構身体を動かすのを好きだったらしく、進んで修練を続けていく。

・・・これはまんまと作戦にはまってしまっているのだろうか？

「ねえマルポーさん、基礎修練終わったよ？」

「もう終わったのか・・・お前、本当に子供か？」

「見ればわかるじゃないですか」

確かに見た目は5、6歳？位だが正直自分でもおかしいとかんじるくらい身体能力は高い。並みの男性よりもあきらかに筋力持久力等は高い。

「確かに見た目はちっこいけどよ、んーこれが才能ってやつかあ」

「結構苦勞して修練してるんですけど？」

「苦勞してるのはわかるけどよお。なんだ、成長っていうより進化だなお前は」

「・・・あまり反論ができない気がする」

異常なのは自分自身わかっている。それでも俺を捨てないマルポーさんはすごいと思う。ビバ、マルポー！

「けなされた気がするんだが・・・」

「何言ってるんですか、俺はマルポーさんの事尊敬してますよ」

「そうか・・・（本当だろうか？）とりあえず修練は置いて置いて先に進むぞ。もうすぐ依頼者がいる村のはずだからな」

そう、今回はある村からの依頼で最近近くの村を襲っている盗賊団を討伐して欲しいとの事。近隣の村で襲われていないのはこの村ともう1つ2つしか残っていないらしく、各村も傭兵を雇ったらしい。

そのうちの1つをマルポーさんは担当することになった、ということだ。

意外や意外マルポーさんは闘士 ヴァール の中でもそこそ知名度があるらしく、指名依頼というわけだ。

そして2時間も歩いた頃にはおそらく目的地であるつ村が見えてきた。

「あれですか？」

「ああたぶんあの村が依頼主の村だな」

「随分かかりましたけど無事なようでー安心ですね」

「ぎりぎりまで馬に乗っても3週間もかかっちゃまったからな」

「お尻が痛いです・・・」

「坊主も馬は苦手だったか」

と邪笑を浮かべると、頭をがしがしと撫でる。

「・・・痛いですからやめてください」

「遠慮するなよ（笑）」

「遠慮なんてしてません！」

漫才のようなやり取りをしながら村へと近づいていくとこちらに気づいたのか村人達が集まってやや警戒した面持ちで見ってくる。

そしてがっしりした体つきの老人が村人達から一歩前に出てくる。

「貴方達が傭兵か？」

「いや、傭兵は俺だけ。こいつは・・・俺の弟子みたいなもんだ」

「ということは貴方がマルポーさんか。ようこそ、レジーナ村へ。歓迎させてもらうよ」

その言葉と共にようやく村人の警戒が取れた様で、次々に笑顔で歓迎の言葉を投げかけてきてくれる。

「ではすまないがマルポーさんと依頼内容の確認と情報を交換したので、ついてきてくれないかね？」

「わかりました。ゴウはどうします？」

「ふむ、坊やにはつまらないかも知れないね。よかつたら村を見て回ったらどうかかな？」

ここで断る理由もないだろうし、3週間ぶりの村である。ここは好意に甘えて村を見学させてもらおう。

「それじゃあご好意に甘えて見学してきます」

「ふむ、礼儀正しい子だ。ではすまないが見学してきてくれるかな？そんなに時間はかからないから終わったら迎えをよこそう」

そして二人は一回り大きな家へと向かっていった

「さて、それじゃ見て回るかな」

といってもそれほど大きな村ではないし、何か珍しい物があるわけでもなく。さほど時間もかからず一通り歩きまわってしまった。

「村としてはぼちぼちの大きさか「あんた誰よ？」・・・な？」

背後から突然話しかけられ後ろへと振り向くと、そこにはこちら

を見ている幼児が。いや、俺も見た目はそんなに変わらないんだけどねうん。

黒のおさげを揺らしながらエメラルドグリーンの色をした瞳でじっと見てくる。

「俺はさっきやってきた傭兵の・・・弟子？みたいなものかな」

「ふくん、弱そうね」

ストレートすぎる。

「ま、まあまだまだ修行中の身だからね」

「本当にあたし達の村を守れるの？」

「守るさ！クルダの傭兵は牙無き人たちの牙、大切な者たちを守る為ならクルダの傭兵は絶対無敵！・・・マルポーさんの受け売りなんだけどね」

「そ、そう。しっかり守ってよね！」

そう言い放つと走り去っていく。やはり子供でも、いや子供だからこそ盗賊たちの恐ろしさはよく聞かされてるのだろう。

少女を見送っていると思知らぬ男性から声をかけられた。知っている人がいるわけもないけど。

「君がゴウ君かな？」

言い方が悪いかもしれないがさして大きな村でもなく、村人以外の子供がいればわかるだろう。この問いかけも確認の意味を込めて

だろう。

「はい」

「そうか、傭兵の人からさきに宿に連れて行って欲しいといわれてね」

「そうなんですか」

「それじゃついて来てくれるかな」

とゆっくりと歩き出した

「はい」

前を歩く人の隣に向かってやや小走りで歩き出す

しばらくはこの村が生活のベースとなる。色々準備しないとな

こうしてレジーナ村での短い、しかし心を変えた生活が始まったのであった

外伝2（後書き）

いきなりですがすいません

やはり土日は仕事の都合上UPしにくいです……

さらには執筆途中での火狐のクラッシュ

初心者にはかなり心が折れかける出来事ですがとりあえずUPできました

なるべく早くできるようがんばりますのでよろしくおねがいします

お知らせ

現在執筆中のこの作品ですが・・・とりあえずシャドウスキルの世界を有る程度書いてから本編、ネギま編を執筆しようかとおもっております

何故かと言うとクロス先のシャドウスキルという作品、正直メジャーとはあまりいえません。悲しいことに。

有る程度シャドウスキルの世界観を描いたほうが読者の方々にいかな、という思いで外伝を有る程度書いていくつもりです。

なるべく早く書き上げてネギま編へいきますので！orz

自分の描写力不足と遅筆が重なり世界観が再現できているかどうかはわかりませんが精一杯書かせていただきます！

あ、あと作品の用語集などもこれから記載していこうと思っています。・・・wikiとエンサイクロペディア使いますが・・・メジャーじゃないので細かい設定などもわかる人もおらずですしねきつと^^^；絶対にマイナーとは言いたくないw

以上 お知らせになります

外伝3

レジーナ村に来て12日、今日もいい天気だ。あれから盗賊達が現れたという噂もなく、各村が傭兵を雇ったという情報を仕入れてこの辺りを去っていったのかもしれない。

そんなこんなで今日も修練の日々、基礎修練を強化したのをしているだけだな！

マルボーさんは基礎修練をやりきるだけでも凄いらしい。さすがにそろそろ俺は才能があるのだと自覚してきた。が、実際に闘ったこともなくマルボーさんと組み手しかしたことがない。

マルボーさんより身体能力は高いらしいのだが、傭兵を10年続けている年季はその程度じゃ負けないといわれた。

だが、俺は人を殺すのが怖い。マルボーさんが心配するほど異常なくらい殺人におびえを見せる。それほど異常に恐怖する。

このクルダ王国というか聖アシリアーナ王国において人を殺すという行為は一般的ではないものの、さほど珍しくない。どここの村が襲われたとかどこぞの傭兵が死んだなど、そういった話はよく聞く。

「何故だろう、ね！」

ヒュウン！！

-----クルダ流交殺法 表技

ハーケン

刃拳

高速で振りぬいた拳は空を切り、真空の刃を走らせ離れた場所にある木のポール数本をまとめて断ち切る。その切り口は鋭い剣で斬ったような滑らかさであった。

「あ、またやっちゃった」

ポールを1本作るのにも時間がかかる、なおかつ闘士 ヴァール
見習いとはいえそこらの木で作っては強度的に無理だ。

「凄〜い」

振り返れば以前村を見学しているときに出会った黒いおさげの女
の子が立っていた。ここまで近づいてきていたのにも気づかないと
は、考えすぎだなと首を振る。

「・・・どうしたの？」

「ううんなんでもないよ。それよりどうしたの、こんな所まで？」

今修練している場所は村に危険がないように、少し離れた場所
でしている。気をつけてはいるが意外と広範囲に被害が広がる場合
があるので注意が必要だ。

「この間のこと・・・謝ろうかと思って・・・」

「いや、別に謝ることもないと思うんだけど？」

「いいから！強く言い過ぎてごめんなさい！」

この少女は随分と大人っぽい性格をしているらしい。女性のほう
が精神の成熟が高いとはよく言ったものだ。

「私の名前はグランス・アーリー。貴方は？」

「俺の名前は・・・ゴウ」

「ゴウだけ？苗字は？」

「俺、マルボーさんに拾われる数ヶ月前までの記憶がないんだよ。どうやらこけて頭に石がぶつかったせいらしいけど」

するとグランスは申し訳なさそうに

「あ・・・ごめんなさい・・・」

「気にしないでいいよ、俺はあんまり気にしてないし。むしろマルボーさんに拾われてよかったと思うよ。記憶はないけど」

「・・・」

グランスがうつむいてしまった。しまった余計な一言を付け加えたようだ、これだから空気の読めない奴といわれるんだ。

・・・誰にだ？

俺は時折突拍子もない考えが浮かぶ、おそらく失った記憶のせいだろっけど。

ひどく気まずい沈黙が訪れる。本当に俺は気にしてないんだがなあ

ギ・・・ギギギ・・・ギイイイ　ピイイギヤーギヤーギヤー

突然遠くから木がすれるような音と鳥達が大声で鳴くが響き渡る

これはまさか、盗賊達がきたのか!?

「じめん!」

「え・・・きゃ!?!」

俺はフランスを抱えると全速力で村へと戻っていった。急げば数分で村へとたどり着く!

「ちよ、ちよつとお!」

フランスには悪いが今は話しを聞いている暇は無い!

村はもう見えてきた、村の人たちは!?

村へ飛び込むと中心辺りに人が集まっている。集まっている人たちの前でフランスを下ろすと目の前にいる村の人にどうなっているのか尋ねる

「さっきの物音は!?!」

「つ、ついさっきマルポーさんがいやな気配がするって言って飛び出しっていったんだ・・・」

「だ、だから俺たちは村人集めてて」

マルポーさんは盗賊と思われる気配を察知して飛び出して言ったようだ。よほどの腕利きではない限りマルポーさんなら・・・

そんなことを考えていると

ゴオオオオオ！ ギ・・・ギギギ

ギ・・・

村から離れた場所の森の木々の間を縫って空へと炎の刃が走る

「まさか・・・呪符魔術士 スイレーム がいるのか!？」

呪符魔術士 スイレーム 人を呪いその生命を奪うことで糧を得、業とともに生きる彼らは呪いを符にこめ、力に変える。符の威力は術者の背負う業に比例していく。

そんな炎の刃が空を切り裂いたのを見て思わず走り出す！

「村の人は全員集まっていつでも逃げれる用意を！」

とまどう村人達を尻目に炎の刃があがったと思われる場所へと先程以上のスピードで走り出す

ほとんど時間をおかずにマルポーさんがいる場所にたどり着く、着くと同時にその眼に見たものは盗賊ごと炎の刃に両断されるマルポーさんの姿だった

「・・・あ、あああああああああああああああああああああああ
あああああ!？」

外伝3（後書き）

早めに仕事が終わったので投稿できました
明日は投稿できるかなあ

外伝4（仮）（前書き）

昨日のことですがつかっていたNPCの調子はかなり悪くエラー画面になり起動すら困難になっていました

現在も反応がかなり遅くなっています

遅筆な上にこんなことになってしまいました>><

とりあえずメインPCの方をなるべく早く復旧させるべく行動中です

なんとか復旧成功？はしたんですが

色々いじっているうちになんとか復旧はできたかもです

執筆中のやつもなんとか無事だったのでとりあえずできたところまで仮投稿させていただきます

守りが間に合ったことによりやや笑みを浮かべる呪符魔術士 スイレーム、感情を見せたということはそれほど余裕が無かったということ

炎刃を避けたとはいえ俺の見た目は子供、危害を加えられないと高をくくっているのだろう

だが甘い

全身に力を込め、さらに横に左回転そのまま左肘を呪符の守りへと叩きつける！

ガギイ！

肘の一撃は呪符の力場に大きな痺をいれる。破られなかったことに安心したのか一瞬気を抜く呪符魔術士 スイレーム
まだ俺の技は終わっていない

叩きつけている肘をそのままに左拳へと力の限り右の掌打を打ち付ける

バリーイイイイイイイン！！

- - - - - クルダ流交殺法 表技 圧潰 アクス

打ち付けられた掌打によりその威力を倍加させた一撃はたやすく力場を打ち砕き、呪符魔術士 スイレーム に喰らいつく

バギバギバギィ

左肘が肋骨を砕き、内臓までも破壊していった

残ったのは……胸部を陥没させ血まみれになって死んでいる
呪符魔術士 スイレーム と数十人分の死体とマルボーさんの死体
そして、全身で息をしているゴウだけであつた

「はあ、はあ、はあ、うばええええええええええ」

例えマルボーさんの敵とはいえこの手で人を殺した……ま
るで感覚が他人事のように感じられる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8263o/>

魔法先生ネギま ～最高の栄誉と恐怖を司る者～

2010年11月25日09時45分発行